特254
631

土佐日記

校註

全

安松植 著註校

東京
國民圖書株式會社

始

特254
631
001

土佐日記

校註

全

安松植 著註校

東京
國民圖書株式會社

特 254
631

校註者 植松安

校註 土佐日記 全

東京 國民圖書株式會社

はしがき

一、本書は、高等諸學校の教科書にあて、兼ねて一般國文學の自習書として編纂しました。

一、本文は、土佐日記最古の寫本として傳はる、前田侯爵家所藏定家卿自筆本をもとゝし、考證その他二三の書をも參考しました。

一、頭註は、學生や自習者の便を考へ、やゝ多き程度に載せました。

土佐日記

男もすなる日記と言ふ物を、女もして試むとてするなり。それの年、師走の二十日餘り一日の日の戌の時に門出す。その由聊か物に書きつく。

或る人、縣の四年五年果てて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、住む館より出でて、舟に乘るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年頃見え具しつる人々なむ、別れ難く思ひて、頻りにとかくしつゝ罵るうちに、夜更けぬ。

二十一日に和泉國までとたひらかに願ひたつ。藤原言實、舟路なれど馬のはなむけす。上し中も醉ひあきて、いと怪しく、潮海の邊にてあざれあへり。

二十三日。八木康敎と言ふ人あり。この人、國に必ずしも言ひ使ふ者にもあらずなり。これぞたゞしきやうにて馬の餞したる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心あるものは、恥ぢずぞなむ來ける。これは、物によりて褒むるにしもあらず。

○それの年　承平四年。
○或る人　貫之自身
○縣の四年五年　國司がその國にある任期。
○例の事ども　事務の引繼ぎなど。
○解由　事務引繼ぎの證文。
○あざれ　戯れる意
○上し中も　流布本には「上中下」とあり
○國に必ずしも　國司の聽に出仕する樣な人ではなかつた。
○たゞしきやうにて　禮儀正しく。

○講師　國分寺任僧
○守の館　新任の國司の官舎。
○かづけたり　贈物をした。
○前守　貫之自らをいふ。
○しろたへの　衣、袂、紐、帯、又は雲雪、波等の白きものの枕詞。
○行きかひて　行き交つて、交代して。
○我に似べきは　私に似て辛い公務に與る人は。
○さかしき　よい。

二十四日。講師、馬の餞しに出でませり。ありとある上下、童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

二十五日。守の館より呼びに文もて來たなり。呼ばれて至りて、日一日夜一夜、とかく遊ぶやうに明けにけり。

二十六日。猶守の館にて、饗應しのゝしりて、郎等までに物かづけたり。唐歌、聲あげていひけり。倭歌、主人も客人も異人も言ひあへりけり。唐歌はこれに得書かず。

倭歌あるじの守のよめりける、

都いでて君にあはむと來しものをこしかひもなく別れぬるかな

となむありければ、かへる前守のよめりける、

しろたへの浪路を遠く行きかひて我に似べきはたれならなくに

異人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかく言ひて、前守、今のも、もろともにおりて、今の主人も前のも、手取りかはして、醉ひ言に、心よけなることして出でにけり。

二十七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくするうちに、京にて生れたりし女子、

○ある人の　貫之の
○あるものと　また生きてゐると思つて
○守の兄弟　新國司の兄弟。
○行く人　貫之。
○猶取　船頭、水夫。

國にて俄に失せにしかば、このころの出立いそぎを見れど、何事もいはず。京へ歸るに、女子のなきのみぞ悲しみ戀ふる。在る人々もえ堪へず。この間に、ある人の書きて出せる歌、

都へと思ふものの悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

また或時には、

あるものと忘れつゝ猶なき人をいづくと問ふぞ悲しかりける

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に、守の兄弟、また異人これかれ、酒なにと持て追ひ來て、磯におり居て、別れ難きことを言ふ。守の館の人々の中に、この來たる人々ぞ、心あるやうには言はれほのめく。かく別れがたく言ひて、かの人々の口網ももうもちにて、この海邊にて荷ひいだせる歌、

をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち羣れてこそ我は來にけれ

といひてありければ、いといたく愛でて、行く人のよめりける、

棹させどそこひ知られぬわたつみの深きこゝろを君に見るかな

といふ間に、楫取ものの哀れも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早く往なむとて、「潮

みちぬ。風も吹きぬべし。」とさわげば、舟に乗りなむとす。この折に、ある人々、折節につけて、唐の歌ども時に似つかはしきいふ。又ある人、西國なれど甲斐歌などうたふ。かくうたふに、舟屋形の塵も、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる。

藤原言實、橘季衡、異人々追ひ來たり。

二十八日。浦戸より漕ぎ出でて大湊を追ふ。この間にはやくの守の子、山口千岑、酒、よき物ども持てきて舟に入れたり。行く〳〵飲みくふ。

二十九日。大湊に泊れり。醫師、ふりはへて、屠蘇・白散・酒加へて持て來たり。志ある に似たり。

元日。猶同じ泊なり。白散を、あるもの、夜の間とて、舟屋形に差しはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入れてぇ飲ますなりぬ。芋し海帶も齒固もなし、斯樣の物なき國なり。求めしもおかず、たゞ押年魚の口をのみぞ吸ふ。人々の口を、押年魚、もし思ふやうあらむや。今日は郡のみぞ思ひやらるゝ。小家の門のしりくべ繩の鯛の頭、柊、如何にぞとぞ、言ひあへなる。

二日。なほ大湊に泊れり。講師、物、酒おこせたり。

○追ふ　舟でその方に向ふ。
○はやくの守　前に土佐守であつた人。
○酒よき物　酒とよい肴。
○白散　屠蘇の一種
○芋海帶、齒固　みな正月に用ゐる物
○しりくべ繩　注連縄。

三日。同じ所なり、もし、風浪の暫しと惜しむ心やあらむ、心許なし。

四日。風吹けばぇ出で立たず。昌連、酒、よき物奉れり。この斯樣に物もて來る人に、なほしもはあらで、いさゝけわざせさす物もなし。賬ははしき樣なれど、まくる心地す。

五日。風浪やまねば、猶同じ所にあり。人々、絶えずとぶらひに來。

六日。昨日の如し。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は、白馬を思へどいと甲斐なし。唯浪の白きのみぞ見ゆる。かゝるほどに、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川の魚も、海のも、異物ども、長櫃に擔ひつゞけておこせたり。

若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。その歌、

淺茅生の野邊にしあればみづもなき池につみつる若菜なりけり

いともかしこし。この池と言ふは、所の名なり。よき人の、男につきて下りて住みけるなりけり。この長櫃の物は、皆人々に、童までに、くれたれば、飽きみちて、舟子どもは腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、浪立てつべし。かくてこの間に、事多かり。今日破子もたせて來たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてな

若菜籠に入れて、雉など花につけたり。

○まくる心地す　氣が引ける心地がする
○白馬　白馬の節會は昔、正月七日に禁中で行はれた儀式である。
○異物　魚貝外の野菜、鳥など。
○よき人　身分ある人、こゝでは貴人。
○男　夫。
○破子　白木作りの折詰箱。
○今思ひ出でむ　今に思ひ出すだらう。

りけり。とかく言ひ〳〵て、「浪の立つなること。」と憂へ言ひて詠める歌、

行くさきに立つ白浪の聲よりもおくれて泣かむ我やまさらむ

と詠める、いと大辭なるべし。持てくる物よりは、歌はいかゞあらむ。この歌を、これかれ哀れがれども、一人も返しせず。しつべき人も交れれど、これをのみいたがり、物を飲み喰ひて、夜更けぬ。この歌主、「又まからず。」と言ひて立ちぬ。或人の子の童なる、密に言ふ、「麻呂この歌の返しせむ。」と言ふ。驚きて、「いとをかしきことかな。詠みてむやは。詠みつべくは早やいへかし。」と言ふ。まからずとて立ちぬる人を、待ちて詠まむとて求めけるを、夜更けぬとにや、やがて往にけり。「そも〳〵いかゞ詠んだる。」と、訝しがりて問ふ。この童、流石に恥ぢて言はず。強ひて問へば、言へる歌、

ゆく人もとまるも袖のなみだ川汀のみこそ濡れまさりけれ

となむ詠める。かくは言ふものか。愛しければにやあらむ、いと思はずなり。童言にては何かはせむ、嫗、翁にをしつべし。悪しくもあれ、如何にもあれ、便りあらば遣らむとて置かれぬめり。

八日。さはる事ありて、猶おなじ所なり。今宵、月は、海にぞ入る。これを見て、業平

○哀れがれども　賞めそやすけれども。
○しつべき人　返歌する様な人。
○いたがり　口先でほかり賞めて内心では貶す。
○或人の子　貫之の子。
○麻呂　われ、男女共に用ゐる。
○やがて　そのまゝ直ぐに。
○かくは　かうも上手に詠めるものか。
○愛しければ　かはゆいからであらうか
○思はずなり　意外の上手である。

君の、「山の端逃けて入れずもあらなむ。」と言ふ歌なむおぼゆる。若し海邊にて詠まましかば、「浪立ちさへて入れずもあらなむ。」と詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人のよめりける、

照る月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとは海にざりける

とや。

九日のつとめて、大湊より那波泊をおはむとて漕ぎ出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政等なむ御館より出で給びし日より、此所かしこに追ひ來る。この人々ぞ、志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見おくらむとて、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに〳〵、海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にも言ふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれど、この歌を獨り言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども ふみしなければ知らずやあるらむ

かくて宇多の松原を行き過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へたりと知らず。本ごと

○にざりける「にぞありける」の約。
○つとめて　早朝。
○互に　かはる〴〵。
○國の境のうちはとて　國司の廳のある長岡郡の内はと言つて。
○ふみしなければ　文をやることも出來ないから。「し」は語勢を強むる助辭。

○うれ　枝。
○思ふべらなる　思ふらしい。
○男もならはぬは　男でも船路に慣れてゐない者は。
○音をのみぞ泣く　聲をあげて泣いてをるのみである。
○思へらず　思はぬ
○まほる　食ふ。
○かへらや「歸らむや」船唄の囃しの詞
○よんべのうなゐもがな　昨夜の子供にあひたいものだ。
○錢乞はむ　代價を催促しよう。
○おぎのりわざ　品物を買つて代金を借りる事。
○たうめ　老婦人。
○心地惡しみして　心持わるさうにして

に浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびかふ。面白しと見るに、堪へずして、舟人のよめる歌、

見わたせば松のうれごとにすむ鶴は千世のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取の心にまかせつ。男もならはぬは、いとも心細し。まして女は、ふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子楫取は、ふな歌うたひて、何とも思へらず。その歌ふ歌は、

春の野にてぞねをば泣く、若薄に、手をきる〳〵摘んだる菜を、親やまほるらむ、姑やくふらむ、かへらや。よんべのうなゐもがな。錢乞はむ。そらごとをして、おぎのりわざをして、錢ももて來ず、おのれだに來ず。

これならず多かれど書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心は少しなぎぬ。かくて行き暮らして、泊にいたりて、おきな人ひとり、たうめ一人あるがなかに、心地惡しみして、物ものし給はでひそまりぬ。

十日。那波の泊にとまりぬ。

○例の事でも　倉事
○序に　關連して。
○音の人　土佐で死んだ女の子。

十一日。曉に舟を出して室津をおふ。人皆まだ寢たれば、海のありやうも見えず、ただ月を見てぞ、西東をば知りける。かゝる間に、皆夜明けて、手あらひ、例の事どもして、ひるになりぬ。今し、はねといふ所に來ぬ。わかき童、この所の名を聞きて「はねといふ所は、鳥の羽のやうにやある。」といふ。まだをさなき童のことなれば、人々笑ふに、ありける女童なむ、この歌をよめる、

まことにて名に聞く所はねならば飛ぶが如くにみやこへもがな

とぞいへる。男も女も、いかで疾く京へもがなと、思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、實にと思ひて、人々わすれず。このはねといふ所問ふ童の序にぞ、又、昔の人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るゝ。今日はまして、母のかなしむことは、下りし時の人の數たらねば、ふる歌に「數はたらでぞかへるべらなる。」と言ふことを思ひ出でて、人のよめる、

世の中に思ひやれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな

といひつゝなむ。

十二日。雨ふらず。文時、維茂が舟のおくれたりし、鳴津より室津に來ぬ。

○なにの　なに構ふものか此の蘆の陰ならば誰にも見えないからとそれに託けて

○舟君　舟中の主君即ち貫之自身。
○節忌　斎日の精神
○とりかけ　取換へ
○おちられぬ　精進おちをして肉食した
○くる　くれてやる

十三日。曉にいさゝか雨ふる。しばしありて止みぬ。女これかれ、湯浴みなどせむとて、あたりのよろしき所におりて行く。海を見やれば、

雲もみな浪とぞ見ゆる海士もがないづれか海と問ひて知るべく

となむ歌よめる。

さて十日あまりなれば、月面白し。舟に乗り初めし日より、舟には、紅こくよき衣きず。それは、海の神におぢてといひて。なにの蘆陰にことづけて、ほやのつまの飯鮨、鮨鮑をぞ心にもあらぬ、脛にもあけて見せける。

十四日。曉より雨ふれば、同じ所にとまれり。舟君、節忌す。精進物なければ、午の時よりのちに、楫取、昨日つりたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけておちられぬ。かかること猶ありぬ。楫取、また鯛もて來たり。米、酒などくる。楫取、けしきあしからず。

十五日。今日小豆粥煮ず。口惜しく、なほ日のあしければ、ゐざる程にぞ、今日、二十日餘り經ぬる。徒らに日を經れば、人々海を眺めつゝぞある。女の童の言へる、

立てばたち居ればまたゐる吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ

○うべも　よくも。
○昔の男　唐の賈島を指す。

○月のうへより　月の上をの意。
○桂なるべし　月世界に生えてをるといふ桂であらうの意。
○久方の　空、天、雨、光、雲等の枕詞。

いふがひなき者のいへるには、似つかはし。

十六日。風浪やまねば、猶同じ所に泊れり。唯海の浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らむとのみ思ふ。風浪ともにやむべくもあらず。或人の、この浪立つを見てよめる歌、

霜だにも置かぬかたぞといふなれど浪の中には雪ぞふりける

さて舟に乗りし日より、今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日。くもれる雲なくなりて、曉月夜いとも面白ければ、舟を出してこぎ行く。この間に、雲のうへも海の底も、同じ如くになむありける。うべも昔の男は、

棹は穿つ波の上の月を、舟はおそふ海の中の天を

とはいひけむ。聞きされに聞けるなり。

またある人のよめる、

みなそこの月のうへよりこぐ舟の棹にさはるは桂なるべし

これを聞きて、ある人、又よめる、

かけ見ればなみの底なる久方の空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやくあけ行くに、楫取等、「黒き雲俄に出で來ぬ。風吹きぬべし。御

舟かへしてむ。」といひて舟かへる。この間雨ふりぬ。いとわびし。

十八日。猶おなじところにあり。海あらければ舟いださず。この泊、とほく見れども、近く見れども、いとおもしろし。かゝれども苦しければ、何事もおもほえず。男どちは心やりにやあらむ、唐歌などいふべし。舟もいださで徒らなれば、ある人の詠める、

いそぶりのよする磯には年つきをいつともわかぬ雪のみぞふる

この歌は、常にせぬ人の言なり。また人の詠める、

かぜによる浪のいそには雲も春もえ知らぬ花のみぞ咲く

この歌どもを、少しよろしと聞きて、舟の長しける翁、月比くるしき心やりに詠める。

立つなみを雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる

この歌どもを、人の何かといふをある人聞きふけりて詠めり。その歌、よめるもじ、三十文字あまり七文字、人みなえあらで笑ふやうなり。歌主、いと氣色あしくてえず。まねべどもえまねばず、書けりともえ讀みすへがたかるべし。今日だにかくいひ難し。まして後にはいかならむ。

十九日。日あしければ、舟いださず。

○か、れども　こんなに景色はい、が。
○何事もおもほえず　面白いとも思はぬ。
○心やり　氣晴らし
○いそぶり　磯に打ち寄せる波、荒波。
○常にせぬ　常に歌を詠まない人の作。
○舟の長しける翁　貫之自身のこと。
○月比　數月來。
○はかる　欺く。
○ふけりて　深く思ひ入つて。
○えあらで　こらへかねて。

二十日。昨日のやうなれば舟出さず、みな人々うれへ歎く。苦しく心もとなければ、ただ日の經ぬる數を、今日いくか、二十日三十日とかぞふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。寐も寢ず、二十日の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出でくる。斯樣なるを見てや、むかし安部仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて、歸り來たる時に、舟に乘るべきところにて、かの國人、馬のはなむけし、わかれ惜しみて、彼所の唐歌つくりなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂のぬし、「我が國はかゝる歌をなむ、神代より神もよむたび、今は上中下の人も、かやうに別れをしみ、よろこびもあり悲しみもある時には、詠む。」とてよめりける歌、

あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

とぞ詠めりける。かの國人、聞き知るまじう思ほえたれども、ことの、男文字にさまを書き出して、こゝの詞傳へたる人に、いひ知らせければ、こゝろをや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ愛でける。唐土とこの國とは、こと異なるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今、そのかみを思ひやりて、或人のよめ

○今日だに　歌を聞いた今日でさへ。
○寐も寢ず　眠りもしない。
○あかずやありけむ　名殘を惜しんでか
○ことの　言葉の意味。
○男文字　漢字。
○そのかみ　その當時。

○この間に　この様に船を漕ぎ行く間に
○なほこそ　斯様に遠く来てもなほ。
○見やるれ　見かへられる。
○ものいふやうにうまい事をいふ様に
○人の程　人の身分
○答むるなり　聞き咎めるのである。
○國よりはじめて　土佐を出發して只来

る歌、

都にてやまのはに見し月なれどなみより出でてなみにこそ入れ

二十一日。卯の時ばかりに舟出す。皆人々の舟出づ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おほろけの願ひによりてにやあらむ、風も吹かず、よき日出できて漕ぎ行く。この間に使はれむとて、つきて來る童あり。それが歌ふふな歌、

なほこそ國の方は見やらるれ吾が父母ありとし思へばかへらや

とうたふぞ哀れなる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、黒鳥といふ鳥、巌のうへに集りをり、その巌のもとに浪白くうち寄す。楫取のいふやう、「黒き鳥のもとに、白き浪をよする。」とぞいふ。その詞何とはなけれども、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば答むるなり。斯くいひつゝ行くに、舟君なる人、浪を見て、國よりはじめて、海賊報いせむといふなる事を思ふうへに、海の又おそろしければ、頭も皆しらけぬ。七十八十は、海にあるものなりけり。

わが髪のゆきと磯邊のしら浪といづれまされり沖つしまもり

楫取いへ。

○海賊報いせむと　貫之が土佐に居た時海賊を度々捕へたのでその歸路を捕へて復讐しようといふ噂を聞いて心配する。
○しらけぬ　心配で白くなった。
○楫取いへ　船頭よ代りに答へよ。
○おそり　恐れ。
○たむけ　道筋の神に道中の無事を祈る事。
○幣　神に捧る幣帛

二十二日。よんべのとまりより、他泊りをおひて行く。はるかに山見ゆ。年九つ許りなる男の童、年よりは幼くぞある。此の童舟を漕ぐまゝに、山も行くと見ゆるを見て、あやしきこと歌をぞよめる。そのうた。

漕ぎて行く舟にて見れば足引の山さへ行くを松は知らずや

とぞいへる。をさなき童のことにては、似つかはし。けふ海あらけにて、磯に雪ふり、浪の花さけり。ある人のよめる、

浪とのみひとへに聞けどいろ見れば雪と花とにまがひけるかな

二十三日。日照りて曇りぬ。この邊、海賊のおそりありといへば、神佛をいのる。

二十四日。昨日のおなじ所なり。

二十五日。楫取等の「北風あし。」といへば、舟いださず。海賊追ひ來といふ事、絶えずきこゆ。

二十六日。まことにやあらむ、海賊追ふといへば、夜半ばかりより舟をいだして漕ぎ來る。道にたむけする所あり。楫取して幣たいまつらするに、幣の東へ散れば、楫取の申して奉ることは、「この幣の散るかたに、御舟すみやかに漕がしめ給へ。」と申してたてま

○わたつみの道觸の神　水路に在す神。
○その音　帆をあゆる音。
○たうめ　老女。

つるを聞きて、ある女の童のよめる、

わたつみの道觸の神にたむけする幣のおひ風やまず吹かなむ

とぞ詠める。この程に風のよければ、楫取いたくほこりて、「舟に帆あけ。」なぞ喜ぶ。その音を聞きて、わらはもおきなも、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に淡路のたうめといふ人のよめる歌、

追風のふきぬる時はゆくふねも帆手うちてこそうれしかりけれ

○かしこく　甚だしく。

とぞ、天氣のことにつけて祈る。

二十七日。風吹き浪あらければ、舟いださず、此彼かしこく歎く。男だちの唐歌に、「日を望めば都遠し。」なぞいふなる事のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

日をだにもあま雲ちかく見るものを都へとおもふ道の遙けさ

又ある人のよめる。

吹くかぜの絶えぬかぎりし立ちくれば波路はいとゞ遙けかりけり

○つまはじき　物を慣み罵る時にするもので爪彈きの事。

日ひと日風やまず。つまはじきして寢ぬ。

二十八日。よもすがら雨もやまず。今朝も。

○京の子の日　小松ひきといつて野邊に出て小松をひいて御代を祝ふ行事がある
○おもしろきところ　景色のよい所。
○土佐といひけるところに住みける女　貫之自身のこと。
○しばしありし所　しばらく住んで居た所。
○せざなり　せざるなり。
○からく　辛うじて

二十九日。舟いだして行く。うら〳〵と照りてこぎ行く。爪の長くなるを見て、日を數ふれば、今日は子の日なれば切らず、正月なれば、京の子の日のこといひ出でて、「松もがな。」といへど、海中なれば難しかし。女の書きて出せる歌、

おほつかなけふは子の日か蜑ならば海松をだに引かましものを

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいかゞあらむ。又ある人のよめる歌、

今日なれど若菜もつまず春日野のわが漕ぎわたる浦になければ

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろきところに舟を寄せて、「こゝや何處。」と問ひければ、「土佐のとまり。」といひけり。むかし、土佐といひけるところに住みける女、この舟にまじれりけり。そがいひけらく、「昔しばしありし所の、なたぐひにぞあなる。あはれ。」といひてよめる歌、

年頃をすみしところの名にし負へば來よる浪をもあはれとぞ云へる

三十日。雨風ふかず。「海賊は夜ありきせざなり。」と聞きて、夜中ばかりに舟を出して、阿波の水門を渡る。夜中なれば西東も見えず、男女からく神佛をいのりて、この水門を渡りぬ。寅卯の時ばかりに、奴島といふ所を過ぎて、田無川といふ所をわたる。からく急

○ものならず　恐るるに足りない。
○風波　風の爲に立つ波。
○五色　青、黄、赤、白、黑。

○なぞたゞごとなる　何といふ平凡な言葉であらう。
○えしもこそ諍ひへ　強ひて非難することは出來ぬ。
○つゞめきてやみぬ　私語したのみで非難する事を思ひ止つた。

ぎて、和泉灘といふ所に至りぬ。今日海に、浪に似たるものなし。神佛のめぐみかうぶれるに似たり。けふ舟に乘りし日より數ふれば、三十日あまり九日になりにけり。いまは和泉國に來ぬれば、海賊ものならず。

二月一日。朝の間雨ふる。午の時ばかりに止みぬれば、和泉灘といふ所より出でて漕ぎ行く。海のうへ昨日の如くに、風浪みえず。黑崎の松原をへて行く。所の名は黑く、松の色は青く、磯の浪は雪のごとくに、貝のいろは蘇芳に、五色に今ひといろぞ足らぬ。この間に、今日は箱浦といふ所より、綱手ひきて行く。かく行くあひだに、ある人のよめる歌、

玉くしげはこの浦なみたたぬ日は海をかゞみとたれか見ざらむ

又舟君のいはく、「この月までなりぬること。」と歎きて、苦しきに堪へずして、人もいふ事とて心やりにいへる歌、

ひく舟の綱手のながき春の日を四十日五十日まで我は經にけり

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとなると密にいふべし。舟君の辛くひねり出して、よしと思へる事を、えしもこそ諍ひへとて、つゞめきてやみぬ。にはかに猶波たかければ、とどまりぬ。

○うちも寄せなむ　うち寄せて欲しい。
○白玉　亡き愛兒を喩へたのである。
○親をさなくなりぬべし　子の愛に引かされて親も愚かになるであらう。
○玉ならず　玉に喩へる親の子ではなかつたらうに。

二日。雨風やまず、日ひとひ夜すがら、神佛をいのる。

三日。海のうへ昨日のやうなれば、舟いださず。風の吹くことやまねば、岸の浪たちかへる。これにつけてもよめる歌、

緒をよりてかひなきものは落ちつもる涙の玉をぬかぬなりけり

かくて、今日暮れぬ。

四日。楫取、「けふ風雲のけしき甚だあし。」といひて、舟出さずなりぬ。然れども終日に浪風たたず。この楫取は、日もえ計らぬ乞食なりけり。この泊りの濱には、くさ〳〵のうるはしき貝石など多かり。かゝれば、たゞ昔の人を戀ひつゝ、舟なる人の詠める、

寄する浪うちも寄せなむわが戀ふる人わすれ貝おりて拾はむ

といへれば、ある人、堪へずして、舟の心やりによめる、

わすれ貝ひろひしもせじ白玉をこふるをだにもかたみと思はむ

となむいへる、女兒のためには、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむを、人いはむや。されども、死兒顏よかりきといふやうもあり。猶同じ所に日を經ることを歎きて、

○手をひでて　手を浸して。
○妹がうむ「小津」の序詞。
○係せば　催促する
○あさぎた　朝吹く北風。
○うつたへに　ひたすらに。
○われ　自分では。
○風間　風の絶え間
○あやなくも　道理にかなはず。

ある女のよめる歌、

手をひでて寒さもしらぬ泉にぞ汲むとはなしに日ごろ経にける

五日。けふ辛くして、和泉灘より、小津のとまりをおふ。松原目もはるゝなり。これかれ苦しければ、詠める歌、

行けどなほ行きやられぬは妹がうむをつの浦なる岸の松原

かくいひつゞくる程に、「舟とく漕け、日のよきに。」と催せば、楫取、舟子どもにいはく、「御舟より仰せ給ぶなり。あさぎたの出で来ぬさきに、綱手はや引け。」といふ。この詞の歌のやうなるは、楫取のおのづからの詞なり。楫取は、うつたへに、われ歌のやうなることといふとにもあらず。聞く人の、「あやしく歌めきてもいひつるかな。」とて、書きいだせれば、實に三十文字あまりなりけり。今日浪なたちそと、人々終日に祈るしるしありて、風浪たたず。今し鵠むれるてあそぶところあり。京のちかづく喜びのあまりに、ある童のよめる、

いのり来る風間と思ふをあやなくも鵠さへだになみと見ゆらむ

といひてゆく間に、石津といふ所の松原、おもしろくて濱邊遠し。また住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人の詠める、

いま見てぞ身をも知りぬる住の江の松よりさきに我は経にけり

こゝに昔へ人の母、一日かたときも忘れねばよめる、

すみの江に舟さしよせよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく

となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しき心地しばしやすめて、またも戀ふる力にせむと成るべし。かくいひて、眺めつゝ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕けども漕けども、しりへ退きに退きて、ほとゝしくうちはめつべし。楫取のいはく、「この住吉明神は例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ。」とは今めくものか。さて、「幣を奉り給へ。」と云ふ。いふにしたがひて、幣たいまつる。かく奉れど、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風浪のあやふければ、楫取又いはく、「幣には御心のいかねば、御舟も行かぬなめり。猶うれしとおもひたふべき物たいまつり給へ。」といふ。又いふに隨ひて、いかゞはせむとて、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉る。」とて、海にうちはめつれば、口惜し。さればうちつけに、海は鏡のおもてごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神のこゝろの荒るゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな

○昔へ人の母　死んだ娘の母、即ち貫之の妻。
○うちはめつべし　船が沈みさうである
○明神　名神の轉、神祇の正しいものに與へられた此格。
○例の神　例の物の欲しい時には海上に風波を起して船を妨げる神を指す。
○今めくものか　神も當世風で慾の深いことであるわい。
○もはら　專ら。
○うちつけに　即座に、見てゐる中に。

○うつら〳〵　つちつらと同意。
○澪標　水路を示す標材。
○入り立ちて　這入り込んで。
○舟君の病者　病に惱まされてゐる貫之
○こち〳〵しき人　無骨一遍の人。
○きときて　やつとのことで來るは來たが。
○なづむ　船足も病も捗々しくない。

いたく、住江忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつら〳〵、鏡に神の心をこそは見つれ。掛取の心は、神の御心なり。

六日。澪標のもとより出でて、難波津をきて河尻に入る。みな人々、女、おきな、額に手をあてて、よろこぶこと二つなし。かの舟醉ひの淡路島の巨子、京ちかくなりぬといふを喜びて、舟底より頭をもたげて、かくぞいへる、

いつしかといぶせかりつる難波がた蘆こぎそけてみ舟來にけり

いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に心地なやむ舟君、いたく愛でて、「舟醉したうべりし御顏には似ずもあるかな。」といひける。

七日。けふ河尻に舟入り立ちて漕ぎのぼるに、河の水干て惱みわづらふ。舟ののぼることいと難し。かゝる間に、舟君の病者、もとよりこち〳〵しき人にて、斯樣の事さらに知らざりけり。かゝれども、淡路たうめの歌に愛でて、都ほこりにもやあらむ、辛くしてあやしき歌ひねり出せり。その歌は、

きときては河の堀地の水をあさみ舟も我が身もなづむけふかな

これは病をすればよめるなるべし。一歌にことの飽かねば、今ひとつ、

○淡路の御　御は女の敬稱。
○ねたき　殘念で。
○あざらかなる物　新鮮な魚類。
○米して　米で貝て。
○飯粒してもつる　「して」は貝て。海毛で飼つると同意。
○ゐざりにのみぞゐざる　全く膝頭で這ふ樣に遲い。
○あがれの處　旅人の行き分れる所、今いふ追分にあたる。

疾くとおもふ舟なやますは我がために水のこゝろの淺きなりけり

この歌は、京ちかくなりぬる喜びに堪へずして言へるなるべし。淡路の御の歌に劣れり。ねたき、いはざらましものをと、くやしがるうちに、よるになりて寢にけり。

八日。なほ河のほりになづみて、鳥養の御牧といふほとりにとゞまる。こよひ舟君、例の病起りていたく惱む。ある人、あざらかなる物もて來たり。米してかへりごとす。男ども密にいふなり、飯粒してもつるとや。斯樣の事、所々にあり。けふ節忌すれば、魚もちゐず。

九日。心もとなさに、明けぬから、舟を引きつゝ上れども、河の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。此の間に、和田泊のあがれの處といふ所あり。米、魚などこへば、おこなひつ。かくて舟引きのほるに、なぎさの院といふ所を見つゝ行く。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には、松の木どもあり、中の庭には、梅の花さけり。こゝに人々のいはく、これむかし名高く聞えたる所なり。故惟喬親王の御供に、故在原業平中將の、

世のなかにたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし

○興ある人　面白く思つた人即ち賞之。
○所ににたる歌　この古跡に相應した歌
○ありあへる　有りあはせる。
○おりのりす　船より陸へ上る。

○よこほれる　横たはり臥すの意。
○八幡の宮　山城の石清水八幡宮のこと
○さゞれ波　小波。

といふ歌よめる所なりけり。いま興ある人、所ににたる歌よめり、

千世へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはかはらざりけり

又ある人のよめる、

君こひて世をふる宿のうめの花むかしの香にぞなほ匂ひける

といひつゝぞ、京のちかづくを悦びつゝのぼる。かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、皆人子どもなかりき。至れりし國にてぞ、子うめる者どもありあへる。人みな舟のとまる所に、子を抱きつゝおりのりす。これを見て、昔の子の母かなしきに堪へずして、

なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくて來るが悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。斯樣の事も、歌もこのむとてあるにもあらざるべし。唐土もこゝも、思ふことに堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

十日。さはる事ありて上らず。

十一日。雨いさゝかに降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山のよこほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ。これを聞きて人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。

○ゐて來たり　持つて來た。
○舟のむつかしさに　舟の煩はしさに。
○あるじしたり　御馳走をした。
○あるじのよき　もてなし振りのよい。

○出で入り　起居振舞。
○にく砂ならず　やさしく禮儀が正しい
○ゐるや・か　恭しいこと。
○履物　茲煙貝の形をした餅菓子。

うれしきこと限りなし。こゝに相應寺の邊に、しばし舟をとゞめて、とかくさだむる事あり。この寺の岸邊に、柳多くあり。ある人、この柳のかげの河の底にうつれるを見てよめる歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳の影のいとして織るかとぞ見る

十二日。山崎にあり。

十三日。なほ山崎に。

十四日。雨ふる。今日、車、京へ取りにやる。

十五日。今日車ゐて來たり。舟のむつかしさに、舟より人の家にうつる。此の人の家、喜べるやうにてあるじしたり。この主人の、又あるじのよきを見るに、うたて思ほゆ、いろいろにかへりごとす。家の人の出で入り、にくけならずゐるやゝかなり。

十六日。今日のようさつ方、京へのぼる序に見れば、山崎の小櫃の繪も、櫻餅のおほちの形もかはらざりけり。賣り人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、鳥坂にて、人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。夜になして、京には入らむと思へば、急ぎし

○とかくありける　兎や角と鄭重にした
○夜になして　夜になるのを待つて。

○京に入り立ちて　全く京都の人となつてしまつて。
○いふかひなく　お話にもならない程。

もせぬ程に、月いでぬ。桂河月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この河飛鳥河にあらねば、淵瀬さらに變らざりけり。」といひて、ある人のよめる歌、

久方の月におひたるかつら河そこなる影もかはらざりけり

又ある人のいへる、

天ぐもの遙かなりつるかつら河そでをひでても渡りぬるかな

又ある人よめり、

かつら河わがこゝろにも通はねどおなじ深さに流るべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて所々も見えず。京に入り立ちて嬉し。家にいたりて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこほれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。

中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預かれるなり。さるは便りごとに、物は絶えず得させたり。こよひかゝることと、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。さて池めいてくぼまり、水づける所あり。邊に松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かた枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大かたの皆あれにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ、戀しきがうちにこの家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかゞはかなしき。舟人も、皆子たかりてのしる。かゝるうちに、猶かなしきに堪へずして、密に心知れる人々いへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しさ

猶あかずやあらむ。又かくなむ、

見し人の松のちとせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、くちをしき事多かれど、えつくさず。とまれかうまれ疾く破りてむ。

○心知れる人　貫之の夫人。
○遠くかなしきわかれ　死別のこと。

○疾く破りてむ　くだらぬ日記を破らう

文暦二年乙未五月十三日乙巳老病中雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆本　蓮華王院寶藏本　草紙白紙不打無堺高一尺一寸三分許廣一尺七寸二分許、紙也廿六枚無軸表紙續白紙一枚端聊折返不立竹無紐

有外題土左日記　貫之筆

其書樣和哥非別行定行に書之　聊有闕字哥下無闕字而書後詞　不堪感興自書寫之昨今二ヶ日終功

桑門明靜

紀氏

延長八年任土左守

在國載五年六年之內

承平四甲午五乙未年事歟

今年乙未歷三百一年紙不朽損其字又鮮明也

不讀得所々多只任本書也

土佐日記終

校註土佐日記全（定價三十錢）

昭和四年二月二十日印刷
昭和四年二月廿三日發行

校註者　東京府下高田町雜司ヶ谷龜原一番地　植松安

發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座（二一八七番　三六八六番　七三八八番）
振替東京五二二九八番

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　古事記全　原文及び假名混文　定價一圓四十錢　送料十八錢

日本女子大學教授校　石川佐久太郎先生校註　註　竹取物語全　定價三十錢　送料四錢

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　大和物語全　定價七十錢　送料六錢

東京女子高等師範教授校　金子彦二郎先生校註　註　堤中納言物語全　定價五十錢　送料四錢

東京帝大助教授校　植松安先生校註　註　土佐日記全　定價三十錢　送料四錢

日本女子大學教授校　石川佐久太郎先生校註　註　蜻蛉日記全　定價一圓　送料六錢

東洋大學教授校　長連恒先生校註　註　紫式部日記全　定價五十錢　送料四錢

東京高等師範教授校　玉井幸助先生校註　註　更級日記全　定價五十錢　送料四錢

國學院大學教授校　山崎麓先生校註　註　徒然草全　定價八十錢　送料六錢

同　註校　方丈記全　附彰考館本方丈記　定價三十錢　送料四錢

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　平家物語全　定價二圓　送料十八錢

東京女子高等師範教授校　金子彦二郎先生校註　註　落窪物語全　定價一圓二十錢　送料八錢

中央大學教授
沼波守先生校註
校註 源氏物語一
自桐壺 至明石
定價一圓四十錢
送料十八錢

同
校註 源氏物語二
自澪標 至藤裏葉
定價一圓五十錢
送料十八錢

同
校註 源氏物語三
自若菜 至雲隱
定價一圓四十錢
送料十八錢

同
校註 源氏物語四
自匂宮 至夢浮橋
定價一圓七十錢
送料十八錢

日本女子大學教授
石川佐久太郎先生校註
校註 大鏡全
定價一圓三十錢
送料十八錢

同
校註 增鏡全
定價一圓三十錢
送料十八錢

319
657

終